

第二編 親鸞と宣長

— 近世文芸における中世的伝統 —

村田昇

緒論

宣長の父祖は代々浄土宗を深く信じ、彼も幼時よりその感化を受け、その信仰は老いて益々篤くなっている。十歳の時芝松坂の走誉上人より血派を受け、英笑の法号を授かり、十九歳の時増上寺菩提樹敬寺にて五重の伝を受け、伝誉英笑道誉居士の法名を賜っている。又彼の生地が伊勢神宮の鎮座座します松坂であったので、幼時より神も信じている。家庭に恵まれ、土地に恵まれ、吉野水分神社の申し子なりといふが如き靈驗を體した宗教的天才として出生した。(1)血と靈と地の総合力の象徴的人間として生れた。以上の如き因縁にある浄土教と神道と、封建政治の教条である仏教といふ三教の一致点と差異点を究明すること、換言すれば東洋の思想を研究することが、青年時代より臨終の夕まで宗教的天才彼の宗教的課題であった。表面は学者として波乱の少い温雅な一生であったが、内心は崇高な奮斗史であった。かうした学問的態度と情熱は、「玉かつま」の「おのが物まなびの有しやう」の条に長々と述べている。その中に、

さて京に在りしほどに、百人一首の改観抄を人に借りて見てはじめて契沖と云ひし人の説を知り、その世にすぐれたる程をも知り

親鸞と宣長

て、此の人のあらはしたる物、余材抄・勢語臆断などを初め、其の外もつぎつぎにもとめ出て見けるほどに、すべて歌まなびの筋の善き悪しきけちめをも、やうやうにわかまへさとりつ。

とあり、又「あしわけをぶね」に、

ここに、難波の契沖師、大明眼を開きて、此道の陰晦をなげき、古書によつて、近世の妄説をやぶり、はじめて、本来の面目をみつけたり。大凡近來此人のいづる迄は、上下の人々、みな酒にゑひ、夢をみている如くにて、たはひなし。此人いでて、おどろかしたるゆへに、やうやう目をさましたる人々もあり、されどまだ目のさめぬ人々が多き也。予さひはひに、此人の書を見て、さつそくに目がさめたるゆへに、此道の味、をのづから心にあきらかになりて、近世のやうのわるきことをさとれり。これひとへに、冲師のたまもの也

とある如く、まづ最初に京都遊学中契沖の影響をうけたのである。その頃学友清水吉太郎が、宣長の仏教を信ずることを難じた事に嗔呼足下道学先生哉、経儒先生哉、何其言之固也、何其言之險也、不佞之於仏氏之言、好之信之且樂之、不啻仏氏之言、而好信樂

之、儒墨喜莊諸子百家之言、亦皆好信樂之、不啻儒墨喜莊諸子百家之言、而好信樂之、凡百雜技歌舞燕海、及山川草木禽獸蟲魚風雲雨雪日月星辰、宇宙所有無適而不好信樂矣、天地萬物皆吾賞樂之具已(稿本全集第二輯、書簡、其二)と答へた。儒者仏を斥けず、宇宙百科を包摂しようとする大乘的近代の態度も亦契沖の学風から学んでいると思ふ。契沖は空海の宗風と学風を伝承して近世初頭の文芸復興に大旗を建てて参加し、博大な学績を遺した。(2)宣長の第二次学問的飛躍の転期は、三十三歳(宝曆十三年五月(七六三))真淵と松坂の新上屋に初対面した時である。

日本浄土教は法然によって大成されたが、これを生活実践によって深め確実にしたのが浄土真宗と称せられる親鸞教である。宣長は法然教を信じたが、その表現した思想は、親鸞教とも一致する点が多い。それは法然教の信仰を礎にして、神典と称せられる古事記を研究した結果であろう。以下浄土教、特に親鸞と宣長学の一致するところを逐次論究してみよう。宣長が親鸞に対し強い関心をもっていたことは次の文でわかる。

もし世人に仰がるるを以て、実にすぐれたりとせば、今の世一向宗の徒、その祖師親鸞を仰ぎ尊む事などは、儒者の聖人を尊むよりも、猶ほるかにまされるは、親鸞の徒は聖人より勝れりとせんか。(くずばな上)

この説問には、親鸞教は反封建的であつて、社会底辺の不運な庶民を敬愛し、その物心両方の幸福の増益を念願としたからであると答えることが最上である。近世文芸の特色は庶民文芸である。その庶民の世界観に大影響があつた親鸞教に対して、文芸学徒の研究は極

めて怠慢であつた。この拙論は些かその欠を補う為に書いた。

自然 宣長曰く「我邦の大道と云ときは、自然の神道あり」(あしわけをぶね)と。その神道は「可畏きや高御産巢日神の御霊によりて、神祖伊邪那岐大神伊邪那美大神の始めたまひて、天照大神の受たまひたもちたまひ、伝へ賜ふ道」(直毘曇で、それは神典に書かれてあるから、「私智をまじへず、ただ神典のままに心得て、これを用ひんこそ神道ならぬ」(講後談)というのである。この神典に対する絶対帰依は、法然、親鸞やその門徒の宣長自身が、所依経典に対する絶対信奉と同じ態度である。法然が「なげきなき経藏にいたり、かなしみかなしみ聖教にむかひて、てづから身づからひらきて見しに、善導和尚の観經の疏にいはいく、一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故といふ文を見えてのち、われがごとくの無智の身はひとへにこの文をあふぎ、もはらこのことはりをたのみて、念念不捨の称名を修して、決宣往生の業因にそなふべし。ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず。又ありし弥陀の弘願に順ぜり云々(昭和新修法然上人全集、聖光上人伝説の詞)

の悲壮さは、宣長が古事記によりて開眼し、その神道を伝うべく敬虔な生涯を捧げたことと似ている。親鸞は恩師法然を絶対に崇拜し、「ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よき人(法然)の仰を被りて信ずるほかに別の子細なきなり。……弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことなれば法然の仰そらごととならんや。法然の仰まことならば親鸞の

まうす旨までもつて虚しかるべからず候歟。(歎異鈔)といひ、「唯可信斯高僧説」と信仰的情調高い「正信念仏偈」を結んでゐる。

宣長も亦恩師契沖、真淵の教学に信順し、神典を無我を信じ、その弘通に学的生涯を捧げた。宣長は「私智をまじえず」神典をよめといった。この無我こそ仏教各宗の神髓で、これ以外に仏道の目的は無い。契沖も亦真言宗に帰依して、「契沖が学者として純粹でありえたのは、彼が真言僧であつたからで、彼の清らかな聖心よりこそ、その澄み渡つた学問的意識は、湧き出たのである」(日本思想史三八八頁)と、村岡典嗣氏は契沖の無我を認めている。法然是叡山第一の智慧僧と称えられていたが、「昭和新修法全上人全集・聖光房との問答」「但源空がごとき頑愚の願ひは、更に其器にあらず」(昭和新修法然上人全集・大原問答時説法の御詞)と自我を絶対否定し、「浄土門還愚癡生極楽(中略)入浄土門之曰、不憑智慧、不護戒行、不調心器、只々無甲斐成無智者、憑本願願往生也云々」(全三心料簡および御法話)とも説いている。親鸞においても、「本願に相應して念仏する人をも、学文してこそななどといひをどさるること、法の魔障なり仏の怨敵」なりと戒めている。

宣長は儒仏を斥けて次の如くいった。
人死して後は、いかなる物ぞといふ事、是先づ第一に、人毎に、心にかかるものなり。人情まことに然るべき事に候。此故に、仏の道は、ここをよく見とりて、造りたて候物に候。一神道の安心は、人死候へば、善人も悪人も、おしなべて皆かみの国へ行く事に候。善人としてよき所へ生れ候事はなく候。一さて、かみの国

は、きたなきあしき所に候へども、死ぬれば、必ゆかねばならぬ事に候故に、此世に、死ぬるほどかなしき事は候はぬなり。然るに、儒や仏や、さばかり至りてかなしき事を、かなしむまじき事のやうに、いろいろと道理を申すは、真実の道にあらざる事、あきらけく候なり。(問答録)

死後夜見の国に行くといふ畏れがあれば、不安が増してくる。天折した方が賢いといふことにもなる。死後の極楽往生は、方便又は迷信なりとしても、これを信じた方が、勇氣、希望が湧く。そこで唐善導大師も「一生勤苦すと雖も須叟の間也。後には無量寿仏の国に生れて、快樂極りなきものとなり。」(六時礼讃)といひ、親鸞も「念仏の衆生は横超金剛心をきはむるが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。故に便同といふなり。しかのみならず金剛心をうるものは、すなはち草提とひとしく喜悟僧の忍を獲得すべし。」(教行信証)と信するのである。

近松が悲劇の人物も、これを信じ、近松も近松の環境社会の庶民も亦信じたのである。ところで死後夜見に往することが、宣長の本心でなかったことは、篤胤が次の如くいったことで明かである。

師翁も、ふと誤りてこそ、魂の往方はかしこぞ、と言はれつれど、老翁のみ魂も、黄泉国には往座さず、その坐す所は、篤胤たしかにとめ置つ。しづけく泰然に坐まして、先だてる学兄達を、御前に侍らはせ、歌を詠み、文など作きて、前にも考へられし、解誤まれることもあるを、新に考へ出でつ。……然在ば、老翁の御魂の座する処は、何処ぞと云ふに、山室山に鎮坐すなり。さるは、人の靈魂の、黄泉に帰くてふ混説をば、いそしみ坐せる事

の、多かりし故に、ふと正しあへ給はざりしかど、然すがに、上古より墓処は、魂を鎮留むる科に、かまふる物なることを、思はれしかば、その墓所を、かねて造りおかして、詠ませる歌に、「山室に：」また「今よりは：」と詠れたる、此は凡て神靈は、こぞ住処と、まだき定めたる処に、鎮居るものなる事を、悟らし、趣なるを、まして彼山は、老翁の世に坐し程、此処ぞ吾が常磐に、鎮坐るべきうまし山と、定置き給へれば、彼処に坐すこと、何か疑はむ。(靈能真柱、下巻)

と宣長の歌は、「山むろに千年の春のやどしめて風にしらね花をこそ見ぬ」「今よりははかなき身とはなげかじな千代の住かをもとめ得つれば」である。この歌は新古今集の作家西行の「願くば花の下にて我死なんその如月の望月のころ」(山家集)と、全く同じで、自然美に包摂され生死解脱した涅槃で、東洋的諦観の象徴である。西行は源平鬪諍の末法に、無常を悲観したが、浄土教に済はれて無量寿を諦認してこの歌を辞世とした。宣長は幼少より家の宗教である浄土教を、「僕也不佞、少来甚だ仏ヲ好ム」(書簡)といふが如く極信し、この宗教的世界観を以て古事記を研究し、浄土教の厭離穢土、欣求浄土といふ現実を否定し、消極的虚無的悲観的思想よりも、古事記の現実絶対肯定積極的光明的思想が、優秀であり日本人本来の思想で人類に冠たるものであるという国粹主義に達した。諸法実相、事々無礙、色即見空とか大乗仏教の哲理も、実は絶対現実肯定で、宣長の浄土信仰の中に、渾沌としてごめいたのが、古事記研究により覚醒されたと考えられる。古事記そのものの中に、大乗仏教的なものが含まれているとも考えられる。又、

古事記は大乗仏教の精神で書かれたとも考えられる。いづれにしても日本人の精神風土は、大乘的である。故に大乘相応之地(3)を称せられてきた。

老荘の自然についてみると、「教行信証」化身土文類に引いた「正法念経」には、「老子の邪風を捨てて、流法の真教に入らせよとなり」とある。これは即ち親鸞の老荘観である。宣長は、

老荘はおのづから神の道に似たる事多し。これかのさかしらを厭て、自然を尊むが故なり。：但しかからの道は、もときかしらを厭ふから、自然の道をしひて立んとする物なる故に、その自然は眞の自然にあらず、もし自然に任ずをよしとせば、さかしらなる世は、そのさかしらそのままにあらんこそ、眞の自然には有べきに、そのさかしらを厭ひ悪むは返りて自然に背ける強事なり。(くずばな下巻)

といった。共に老荘の自然を斥けている。

(1)村岡典嗣「本居宣長」、井上豊「宣長の宗教論」(解釈と鑑賞
・昭和十七年十二月) 佐々木信綱「増補賀茂真淵と本居宣長」
「玉かつま」

(2)拙著「近世文芸の仏教的研究」八三頁以下

(3)高田專僧寺所藏・正統記・三夢記の宝窟傷、親鸞聖人、建久二年九月十四日夜法隆寺參籠廻ノ變夢告伝説

宣長は「宿世」の「宿」を、過去の後向きに信じたことは、彼の源氏物語の「宿世」解釈に見られる。親鸞も亦過去の宿業が、現実存を決定していると信じたが、如来の本願を信じ廻心して、宿業を転じて、新生に向ひ、新しい世界観を展開させているから、宿命

論、虚無主義に止らず、力強い前向きの積極性を抱いていた。かるが故に

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆゑに、悪をおおるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑにと、云々（數異鈔）念仏者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神・地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし、罪惡も業報を感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑに無礙の一道なりと云々（全）

という勇猛精進即ち菩薩道が、顕現している。

宣長も三十四年間、生涯の大半を古事記の完成に捧げた。それは「私古事記伝も、当月十三日全部卒業、……命ノ程を危ク存候処、皇神の御めぐみにかかり、先存命仕候而、生涯之願望成就仕、大悦之至存候儀に御座候（荒木田久老宛書簡）」と、いふ宗教的行願であった。宣長が宗旨とした自然は、親鸞の信じた自然法の如く、宇宙的人類の普遍性はなかった。理性よりも先例、習俗に従ふ保守性があつた。例へば、自分が水分神社の申し子であることを信じつつつけた如きである。生涯を通じて熱烈に儒教を批判したが、親鸞の如き国刑を受けなかつたのは、直接国政を批判せず、且、「みづから道をおこなはむとはせず。道を考へ尋ぬることをぞつとむる」（玉かつま）といふ風に、政治的実践と絶縁していた学者であり、且「そもそも道は、君の行ひ給ひて、天下にしきほどし給うわざにこそあれ、今のおこない道にかなわざらんからに、下なる者の改め行はむは、わたくし事にて、中々に道のころにあらず」（同）という

親鸞と宣長

が如く、権力に依存して妥協的であつた。然るに親鸞は、「かなしきかなや道俗の、良時・吉日えらばしめ、天神・地祇をあがめつつ、卜占祭祀つとめます」（正像末和讃）と、非人格的な呪術を否定し、反タブーの理性人であつた。

竊かにいれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛なり。然るに諸寺の釈門、教に昏く今、真仮の門戸を知らず。洛都の儒林、行に迷ひ令、邪正の道路を弁ふること無し。斯を以て興福寺の学徒、太上天皇、後鳥羽院と号す諱尊成今上土御門院と号す諱為仁聖曆、承元丁卯の歳、仲春上旬之候に奏達す。主上・臣下、法に背き義に逆し、忿を成し、怨を結ぶ。茲に因りて、真宗興隆の太祖源空法師、并に門徒教輩、罪科を考へず狼しく死罪に坐す。或は僧儀を改めて、姓名を賜うて遠流に処す。予は其の一なり。爾れ者己に僧に非ず僧に非ず。是の故に「禿」の字を以て姓と為す。空師并に弟子等、諸方の辺州に坐して、五年の居諸を経たりき云々」（教行信証化身土巻）

と、顕密の旧教を評し浄土教を唱導し、権力為政者を叱咤した罪により、遠流の刑を受けている。怒肩と隆起した頬骨の親鸞の所謂「鏡の御影」を見れば、妥協を許さぬ性格と、悲劇的な一生が想像できるのである。宣長の世俗的幸福な一生も亦、その温和な風貌に現はれている。

親鸞の護国思想 大乘仏教の法は、世界思想中最も普遍妥当性を有している。即ち人類最高の教智である。これが全機能は日本にきて顕現されているから、親鸞が伝統した聖徳太子や伝教の護国思想

も、宣長やその学派の国学者が、考えた如き、偏狭な反人類的なものではなかつた。宣長等には比較宗教学も歴史観も蒙昧であつたら、古事記の原始的な諸々を盲信してしまつた。法然も親鸞も念仏が真実の大乘法であると信行した新興宗教であつた為に、旧仏教から恐れられ妬まれ、承元元年（一一〇七）後鳥羽上皇の勅命で、二人共流罪その他の高弟も流罪又は死刑に処せられた。時に親鸞三十五歳。この事を数十年後に回顧して綴つたのが、前掲化身土巻末尾の文である。然し親鸞は無法の権力的支配者を憎むと共に憐れみ、又、兵乱の世を逃避せず、これを念仏によって救済せうとした。救済される主は、勿論最底辺の群萌である。彼は

念仏まふさんひとびとは、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため、国民のために、念仏をまふしあはせたまひさふらはば、めでたふさふらふべし。往生を一定におぼしめさんひととは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念仏ころにいれまふして、世のなか安穩ななれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえさふらふ。よくよく御按さふらふべし。このほかは別の御はからひあるべしとはおぼえずさふらふ（康元二年七月九日性信坊宛書信）

といふ。「わが御身の料はおぼしめさず」とは、自ら救はれた自信をもつものは、自分の運命は他力の本願に任せて計はず、専ら国家国民が、仏法によつて進化するを念ぜよといつているのである。所謂還相愛を勧進している。彼の理想国家は、鎌倉幕府の如き渾取権力国家でなく、大慈悲国家である。この立場で天皇国家をも畏れず批判している。ここには一向一撥の如き近代思想の原動力が

噴出してゐる。かうした力が些かの妥協を許さず一生相続されてゐる。ここに高僧たる価値があり、中世の特長がある。宣長にも「秘本玉くしげ」には、激しく具體的な藩政批判があり、庶民愛が噴出してゐるけれども、親鸞に比べ、總體的に彼の一生は、いかにしてか辺土の群類を度せんといふ悲壯な還相的庶民愛の迫力は、強大とはいひえられない。親鸞の生きた激動期と異り、封建秩序が堅固整然として、技術的に改革は寸志もなく、身を挺して庶民愛を行動化するよりも、古事記を研究して大和魂の原郷を懐古し、源氏物語を読んで日本美を涵養することの方が、真実の護国となる時代であつた訳である。

親鸞は詩人である。彼の宗旨を表明した「教行信証」は、漢文で書かれたが、学術的論文ではなく、信を得て書かざるを得ず、書くことによつて信弥、深く、信深まつて表現せざるを得ぬ詩的表現である。文学を読みうる少数の弟子に示し、永遠に伝へて人類を創造的進化に善導せんとする散文詩である。慈悲の書である。正信偈や和讃等は韻文詩である。彼の濟度する悪人は、殆んど無智文盲の群萌（庶民）である。そこで彼の方便は説教となつた。説教は聞かせる詩である。専心称名念仏して濟はれる道を説いた。その内容は歎異鈔にしられる。文学によつては群萌を地獄から濟うことは、不可能であつた。文学は学解・知性・自力である。文字を捨てて象徴的な六字名号を唱えるのみで、世界の根源にある靈的な力・美に直通することができる。これを聞信、獲信といふ。親鸞においては信と美は一如である。文字は信を妨げる。古事記の如く文字なき時代や人々の信が、文字学問ある時代や人よりも深く純である。宣長も法然も親

鸞もこれに自覚している。親鸞の時代から今日まで、この宗徒には書かざる詩人、書き得ざる詩人が多くでた。これが日本文化の母胎である。宣長は詩人ではなく、冷静な学者として、宗教を説き、文芸の自律性と、感情の文化的優位を主張した。彼の宗教が民族的神話に依り、実存的「個」の自覚が不徹底な如く、彼の歌も亦駄作である。実存的個とは宿世である。あはれ、かなしみがよろこびに転成する世界である。然るに樂天的な民族神話を信じた宣長に、「個」のあはれがわかろうか。源氏物語のあはれを抽象して、文学の自律性を主張しているが、これも学者の仕事で、真実に深いあはれに同情慟哭してはいないと思ふ。一応は仏教的悲劇的なあはれに心ひかれながらも、これを温存させることは、神話的樂天的清明心が、拒否したと思ふ。彼は俗世の醜惡を避けて、古典的優雅に逸樂せうとしている。(これが彼の非庶民性である。)次の辞世歌が証明する。

山むろに千年の春のやどしめて風にしられぬ花をこそ見ゆ
今よりははかなき身とはなげかじな千代の住かをもとめ得つれば
新古今、定家、草庵集を賞味しているのも、これらに古典的優雅の隱遁美が内在するからである。篤胤が右の歌についての所見は、「靈の真柱下巻」にあって、前に引文した。宣長の辞世歌と親鸞の次の文を比較してみやう。

我が歳きはまりて安養浄土に還帰すといふとも、和歌の浦曲の片
雄浪の、よせかけよせかけ帰らんに同じ。一人居て喜ばば、二人
と思ふべし。二人居て喜ばば、三人と思ふべし。その一人は親鸞
なり。我なくも法は尽まじ和歌之浦、あをくさ人のあらんかぎり
は。(御臨末の御書)

親鸞と宣長

死後安樂静寂を願うことは人情である。清淨静閑な空間に墓地を占有して永眠したいことも人情である。宣長は学者であつたから、墓石の下に弟子と共に研究することは、崇高である。厚葬し墓石を建て、そこに靈の存在を信じて礼拝供養することは、死者に対する礼であり、家族的倫理の美風であるが、法然は、

我菩提所をば造るまじきなり。我跡は称名あるところ、すなはち我跡なりと仰せられけり。また跡をとふろうといふて、位碑卒都婆をたつるは、輪廻するものことなりと仰せられける。(真宗法要拾遺)

といった親鸞については、覚如上人(観応二年没)は、
本師聖人のおほせにいはく、「某親鸞閉眼せば賀茂河にいられてうほにあたふべし」と云々、これすなはちこの肉身をかるんじて佛法の信心を本とすべきよしをあらはしますゆへなり。これをもておもふに、いよいよ喪葬を一大事とすべきにあらず、もとも停止すべし。

といひ、一遍(正応二年没)は、
旅ごろも木の根かやの根いづくにか身の捨てられぬ処あるべき(一遍上人語録)

と歌ひ、妙好人庄松は、
石田村の市藏同行が見舞にきて云えるには、同行(庄松)が死んだら墓をたててあげましょうといえは、庄松「己れは石の下には居らぬぞ」と云われた。(庄松ありのままの記)

とある。かうした解脱した人々と比べると、宣長のことは小乘的美的趣味である。

親鸞は聖徳太子が創建した日本の大乘仏教を、民族の歴史的苦悩を機縁として、更に具体化し生活化した宗旨とした。宣長は外来思想に心酔した国家の危機を憂えて、日本精神の主體性と、文芸の自律性を樹立した。民族の歴史的苦悩は、直接の機縁となっていない。「萬国みなその国々の伝へもあり、守る意もあることなれば、おのおのその国の伝へにより、己が国の意を守らんこそ願ならめ」（くずばな）という伝へが、日本精神の主體性・民族的個性である。その伝への内容は、「可畏きや。高御皇日神の御靈によりて、

神祖伊邪那岐大神伊邪那美大神の始めたまひて、天照大神の受たまひたもちたまひ、伝へ賜ふ道」（直毘靈）である。即ち天照大神が、大和魂を伝えているとして、無批判にこれを信じた。この態度も法然や親鸞の専修念仏の態度に似ている。かくて宣長の神道を知るには、高御皇日神、岐美二神、天照大神を究明することが必要である。

高皇産靈神・神皇産靈神と申す二神の、産靈のみたまと申す物によりて、成出来たる物にして、世々に人類の生れ出、萬物萬事の成出るも、みな此御靈にあらずといふことなし、されば神代のはじめに、伊邪那岐伊邪那美二柱大御神の、国土萬物もろもの神たちを生成し給へるも、其本は皆かの二神の産靈の御靈によれるものなり、抑此産靈の神靈と申すは、奇々妙々なる神の御しわざなれば、いかなる道理によりて然るぞなどいふことは、さらに人の智慧を以て、測識べきことにあらず。（玉くしげ）

即ち神とは生命創造力である。次に天照大神とは、

天照大御神と申し奉るは、ありがたくも即ち今の世を照します、天津日の御事ぞかし（同）

とあつて、太陽崇拜である。この崇拜は、古代埃及に起源したものが、紀元前八百年頃から移動を初め、印度、支那、日本、馬來半島、太平洋、亜米利加等に拡布して。（一）仏教渡来以前に日本に渡来していたので、欽明天皇の時渡来した仏教の太陽崇拜と矛盾することなく、日本民族に受容された。それが記紀の太陽神話となっている。日本における太陽崇拜に関する限り、神明と仏陀の主従を争うことは愚である。

まことの道は、天地の間にわたりて、何れの国までも、同じくただ一すぢなり。然るに此道、ひとり皇国にのみ正しく伝はりて、外国にはみな、上古より既にその伝来を失へり。それ故に異国には、又別にさまざまの道を説いて、おのおの其道を正道のやうに申せども、異国の道は、皆末々の枝道にして、本のまことの正道にはあらず（玉くしげ）

日本人が優秀民族であることは、科学的に立証できるが、さりとて右の文は、人類文化史が肯定しない独断的国粹主義である。宣長は、天照大御神の、御出生まじし御本国なるが故に、萬国の元本太宗たる御国にして、萬ツの事異国にすぐれてめでたき、其一つの品どもは、申しつくしがたき中に、まづ第一に稲穀は、人の命をつづけたもちて、此上もなく大切なる物なるが、其ノ稲穀の萬国にすぐれて、比類なきを以て、其余の事どもを准へしるべし。（同）これも亦異国の実状に無智な幼稚な私論である。

抑々天地は一枚にして、隔なければ、高天原は、萬国一同に戴くところの高天原にして、天照大御神は、その天をしろしめす御神にてましますば、宇宙のあひだにならぶものなく、とこしなへに

天地の限をあまねく照しなして四海萬国此御徳光を蒙らずといふことなく、何れの国とて、此大御神の御蔭にもれては、一日片時も立ことあたはず、世の中に至て尊くありがたきは、此大御神なり。(同)

これは正論である。但し

本朝は天照大御国、その皇統のしるしめす御国にして、萬国の元本大宗たる御国なれば、萬国共に、この御国を尊み戴き臣服して、此まことの道に依り遵はでかなはぬことわり。(同)

という時、秋成も「膽大小心録」で評した如き忽ち恐るべく笑うべき独善的反国際的超国家主義選民意識となっている。古事記神話が天孫民族とその裔孫である天皇一家の尊嚴を誇張して神格化していること、小兒の如く知性の低いことを、克己の結果である純真と錯誤しているのである。親鸞の教行信証には、

「讚阿弥陀仏偈」鸞和尚造也 阿弥陀仏如来……智慧の光明量る可からず。故に仏を又「無量光」と号す。有量の諸相光暉を蒙る。

是の故に真実明を稽首したてまつる。解脱の光輪限音無し。故に仏を又「無辺光」と号す。光触を蒙る者の有無を離る。是の故に平等寛を稽首したてまつる。光雲のごとくにして無礙なること虚空の如し。故に仏を又「無礙光」と号す。一切の有礙光沢を蒙る。是の故に難思議を頂礼したてまつる。清浄の光明対有ること無し。故に仏を又「無対光」と号す。斯の光に遇ふ者は業繋除くる。是の故に畢竟依を稽首したてまつる。仏光照耀して最第一なり。故に仏を又「光炎王」と号す。三塗の黒闇光啓を蒙る。是の故に大応供を頂礼したてまつる。道光明朗にして色超絶したまへ

親鸞と宣長

り。故に仏を又「清浄光」と号す。一たび光照を蒙るに罪垢除くる。皆解脱を得しむ。故に頂礼したてまつる。慈光喜に被らしめ安樂を施す。故に仏を又「歡喜光」と号す。光の至る処に法喜を得しむ。大安慰を稽首し頂礼したてまつる。仏光能く無明の闇を破す。故に仏を又「智慧光」と号す。一切諸仏三乘衆、咸く共に曠誓す。故に稽首したてまつる。光明一切の時普く照す。故に、仏を又「不断光」と号す。聞光力の故に、心断えずして皆往生を得しむ。故に頂礼したてまつる。其の光仏を除きては能く測ること莫けん。故に仏を又「難思光」と号す。十方諸仏往生を嘆じ、其の功徳を称せしむ。故に稽首したてまつる。神光は、相を離れたること名く可からず。故に仏を又「無称光」と号す。光に因りて成仏したまふ。光赫然たり。諸仏の嘆じたまふ所なり。故に頂礼したてまつる。光明照耀して日月に過ぎたり。故に仏を「超日月光」と号す。釈迦仏嘆じたまふこと尚尽きず。故に無等等を稽首したてまつる。(真仏土卷)

これは広大な宇宙光明礼讚の抒情詩である。親鸞はこれに感動しこれを約畧して正信偈・和讃を作っている。親鸞は又「教行信証」に、百億の日月、百億の四天下、百億の四大海、百億の鉄開山、大鉄開山、百億の須弥山、百億の四阿修羅城、百億の四大天王、百億の三十三天、乃至百億の非想、非非想処、かくのごときかずを畧せり。娑婆仏土、われこのところにして仏事をなす。(化身土卷)「大方等大集経」の文を引いている。国際社会とか、人類意識とか、太陽崇拜とか、儒教の天地とかいう如き、狭小なものではない。大宇宙・無宇宙である。広大な宇宙の浪漫詩である。仏典は

文芸である。宣長は文芸を愛し、その自律性を主唱する余り、仏教を排斥した。仏典が勝れた文芸であることを知らなかったからである。これは宣長個人の不倖であることは勿論、日本の文芸・文化・国家の進化の為に害毒を流している。

宣長の伝へは、生理的自然的靈肉一致で、天照大神等善神の神裔は、天壤無窮に生みつゞ神話的自然を、無批判に信仰することである。これは小児がお伽噺を喜ぶ如く、平易である。然し宣長がこれを以て国民倫理・文化の規範としたところに、多くの危険が蔵されていた。その中には、宣長の主観で神話を封建社会に適合すべく解釈していることもある。即ち

(東照神御祖命の) 御盛業、自然とまことの道にかなはせ給ひて、天神天祇も、御加護厚きが故に、かくのごとく御代はめでたく治まれるなり。……東照神御祖命御代々の、大將軍家へ、天照大御神の領けさせ給へる御民なり、国も又天照大御神の預けさせ給へる御国なる。然ればかの神御祖命の御定め、御代々の大將軍家の御掟なれば、すなはちこれ天照大御神の御定の掟なれば殊に大切に思召て、此の御定御掟を、背かじ類さじとよく守りたまひ……民は天照大御神より、預かり奉れる御民ぞといふことを、忘れたまはずして、これ又誠に大切におぼしめして、はぐくみ撫給ふべき事、御大名の肝要なれば云々(玉くしげ)

といふ。彼が斥けた儒教とは異つた思想で、封建倫理を支持している。「はぐくみ撫で給ふ」は、仏教の慈悲に相当するが、ここでは封建社会の身分的秩序から発想されている。仏教の慈悲は菩薩の懺悔下坐行である。親鸞は、

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり、聖道の慈悲といふものを憫みかなしみ育むなり。しかれども思ふが如く助け遂ぐることを極めてありがたし。また浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏に成りて大慈大悲心をもって、思ふが如く、衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとほし不便と思ふとも、存知のごとく助け難ければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏まうすのみぞ未徹底たる大慈悲心にて候ふべき、云々(數異鈔)

といふ。これは御同朋御同行の還相愛・友愛であつて、上下階級の統治意識は毛頭ない。所謂近代的である。

(1)堀一郎日本仏教史論一一頁

安藤昌益 宣長と同時代において対照的学者に安藤昌益(生没年未詳)がいる。彼は社会を「直耕」という農民的生産の機能原理の下で理解し、自然を万物それぞれの相互的機能(営み)のかもしれない調和的秩序(自然)として把握することによって、封建社会の身分的秩序と、机上の学問を否定し、

儒仏医老狂巫の私法の輩、不耕盗食して字書を業とする者は、……字書学問は、転道を盗む罪事……転下の大怨。(自然真字道大序) 法世の人、聖賢学者転定人物の事理講談すと云いて、種々の事を語り、教と為し、これを売って貪り食い、転道を盗み、仏菩薩羅漢諸宗の僧等、品々と説法し、己れ先ず迷うて後に世を迷わす(同・二四・法世物語) 他人の上に立つことを欲せず、下に屈せず、転道を盗まず、人道を怠らず(同・二五)

といひ、慈悲は罪であるから行はない……衆を偽らず己のみを利せず、上に諂はず、下を責めず、慢せず、己を亢ぶらず(同) という

思想もみられる。「転」とは進化である。ハーバート・ノーマン（カナダの日本歴史研究家、太平洋戦争後、カナダ代表代理公使として来日、日本における近代国家、忘れられた思想家の著者）は、昌益は、「明治以前の日本の思想家の中で、封建支配を完膚なきまでに攻撃した唯一の人」（忘れられた日本の思想家）と激賞した。この「反権力」、「個」の精神が。宣長には無い。親鸞には芽ばえていた。宣長においては、民族全體が神話又は歴史的伝統を信順して、そこから

世の中の事は、いかほどかしくても人の智慧工夫には、及びがたき所のあるものなれば、たやすく新法を行ふべきにあらず。すべての事にただ時世のもやうにそむかず、先規の有来りたるかたを守りて、これを治むれば、たとひ少々の弊は有ても、大なる失はなきものなり。（秘本玉くしげ上）

という「個」の自由独創を阻む封建的保守主義が蔽せられる。ここでは政治改進黨の天才が出現する余地皆無である。宣長の伝へは、親鸞の「宿世」「宿業」に相当する。宣長においては、

善神悪神こもごも事を行ひ給ふ故に、世々を経るあいだには、善悪邪正さまざまの事ども有りて、或は天照大御神の皇統にまします……朝廷大に衰へさせたまひて、世の中の乱れし時などもなまにありざれども、然れども悪はつひに善に勝ことあたはざる神代の道理又かの神勅の大本動くべからざる故に、さやうの逆臣の家は、つひにみな滅び亡て云々（玉くしげ）

といふが如く、過現來を通じて、不易の肯定的連續たる樂天的歴史觀である。然るに親鸞においては、「兔の毛羊の毛のさきにいるち

親鸞と宣長

りばかりもつくるつみの、宿業にあらずということなし」（歎異鈔）といふ悲觀的不予定的過去を宿した現在が、如來の本願を聞信して廻心し、

しかれば本願を信せんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに、悪をおそるべからず。弥陀の本願をさまざまのほどの悪なき故にと云々（歎異鈔）

念仏者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神、地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし。罪惡も業報を感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆえに、無礙の一道なり。（同）

が、絶対樂觀的積極的未来に転向した。濟度されたのは現在のみではなく、「噫、弘誓の強縁多生にも値ひ亘く、真実の淨信億劫にも獲亘し、遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」（教行信証・総序）と、過去の宿業も歡喜心を以て諦觀すべく濟度されたのである。絶望の過去現在の宿業の神髓に、如來超世の悲願が、宿藏されていたことを自覺して驚喜し、三世を貫く自業を、自己の全責任として淨化し創造しうる自信を得て、「弥陀五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとへに親鸞一人が為なりけり」（歎異鈔）と立言するのである。個人個人に廻向されている宿業を寵愛し、優劣觀・差別觀をもたず、天上天下唯一無二の歴史を歡喜創造する自我が親鸞の一人であった。釈尊の天上天下唯我独尊の覺位である。親鸞においては、「只念仏して」（歎異鈔）正法を實踐する日日の喜び以外には、何事も要求しなかつた。それが専修念仏・現生不退である。宣長が古事記に対する態度に、これに似た処がある。二人共樂天的人生觀に達

し、神仏の不思議を信じた。

親鸞は罪惡觀も無常觀も人間智も學問否定も徹底していた。宣長は何れの否定も未徹底で、學者であつたから學問は熱心に奨励した。徹底的に學問文字を否定し、直耕と稱して自耕自食を自然としたのは昌益である。自ら農耕し百姓を親愛したことは、親鸞と一致している。昌益が文字を罪惡と考えたことは、仏教の文芸否定と共通している。親鸞には詩歌論はないけれども、勝れた宗教詩人であり、書いた文字も美しい。然し芸術で人間が濟度できるとは考えてみたことはあるまい。仏教の正法は、地上權力を否定する。然るに日本に渡來した仏教は、いつも國家權力の保護をうけ、國家權力に屈從した。國家權力の坐にあるものは、宮廷貴族であつたから、これと親しんだ仏教は、貴族の趣味や美感と習合した。即ち雅に化せられた。雅は宮び、宮びやかである。芸術は時間に閑があり、經濟に余裕のある者のみが、創作を楽しみ、作品を鑑賞して楽しみうるものである。これは時間にも經濟にも余裕の無い貧民には不能なことである。時間や經濟に余裕のある者は貴族である。故に芸術は本来貴族的なものである。成仏とは精神的貴族になることである。精神的貴族は、方便を以て衆生を慈悲する。その方便は芸術となる。上求菩提即下化衆生である。これ迄は自然法爾であるが、仏教芸術が貴族にのみ奉仕して、下層庶民の世俗を忘れ、高踏的唯美的的樂的になり、金と閑のない者は生まれぬものとなれば、その仏教は墮落しており、その芸術は必しも全体的に健康ではない。自然法爾ではない。東大寺・源氏物語・榮華物語・鳳凰堂・全銀閣寺がこれを証明している。日本の國宝級の芸術は、殆んど國家權力と結合した仏

教的の所産である。私はこの意味で國宝を所藏する寺院等を、宗教的に尊敬しない。非僧非俗愚禿の親鸞は、精神的貴族であつたが、俗中に在つた。即ち在家仏教であつた。在家仏教とは、契沖のいう「俗中之真」であり、自然法爾であり、閑暇を要せず昼夜四六時中が、美的生活といふこと、泥中の蓮華ということである。人間生命を生産し愛育する在家仏教は、健康美である。これが文芸としては、記紀歌謡・萬葉集・近世の和歌・俳諧、歌謡にみられる。所謂昌益のいう直耕的文芸である。源氏物語は人間性を歪曲して不自然で嚴格主義の出家仏教の權威に悩まされて、出家仏教からの濟度を受けていない不健康な宗教的患者の病褥のうめめき声である。この時代に親鸞の在家仏教が出現したら、光源氏始め源氏物語の人々は、記紀神話の風格ある清明な原始精神を體得したであろう。源氏物語の人々の下化衆生を忘れ俗を軽んじた唯美耽美享樂生活から醜醉するものは、一種の本能的宿命的な、如何ともすべからざる深い哀愁・世界苦・虚無の深淵を触知させる深い哀感・無氣力、倦怠感である。宣長はこれを淨土宗信仰の體驗で直觀して、

人の情のさまざまに感ずる中に、うれしき事おもしろき事などに感ずること深からず、ただかなしきこと、うきこと、恋しきことなどすべて心に思ふにかなはぬすぢには、感ずることよなく深きわがなるが故に、しか深き方をとりわきて、あはれといへる也」(玉のをじし二)

仏の道といふ物は、殊にものあはれをば、すへる道にして、儒の道などよりも、をしへのきびしき事有て、すべて人の情には、遠かるべき道なれども、かへりて人のこころの、おもむきやすく

て、むげに物のこころしるまじき山が、女童べまでも、あやし
く感ずることふかく、何事につけても、まづ此の道を思ふならひ
なり。さるは世の中の事も、人の身のうへも、まことに、露ば
かりも、かの道にあづかることにはあらざれども、とりたててそ
のことわりを、ひろく身をかへたる後の世かけて、人のおもむき
ぬべく、よげにときしらせたるみちにて、それを聞かれたる、世の
中の心は、たかきもみじかきも、さかしきもおろかなるも、おし
なべてみな此をしへにしみぬるがゆえに、あるは世のはかなきを
見るにけ、あるは身のうきなげきにたへぬをりなど、さかりのか
たちを、墨染の衣にやつし、よばなれたる山のおくに、たえこも
りて、おこなふなど、又さるかたにつけて、物のあはれの深きこ
とおほきによりて、此物語にも、源氏君をはじめて、心ふかき人
はみな、ともすれば此仏の道を思ひ玉ふことを書たる。この世
の中のありさまにて、さるならひになりぬるよの、人の情の、も
ののあはれにぞ有ける。されば益々に、仏の道のこと多くかける
も、そのことわりをしらしむるにはあらず、ただそのすぢにつき
て、あはれを見せたるもの也。(玉のをぐし二)

といった。これで見れば、源氏物語のあはれが、仏教的あはれである
ことを認識している。但し宣長が源氏物語を愛するに至った動機は
年々に松坂を経て伊勢参宮をする勅使達や京洛人の都雅な風俗に幼
時より魅せられた為であろう。かくて経済的貴族ともいへべき富有
な町人医者である彼の有閑趣味が、源氏物語と結合したのである。
源氏物語には解脱(覺・きとり)した人は、一人もない。愛欲の
広海に沈没し名利の大山に迷惑しているのである。美のはかなさを

感じてゐる。空の初門に立っている。これが源語のあはれである。
これが歎異鈔において楽天剛健な絶対積極に転じてゐるのは、文芸
において、古事記・萬葉集の健康なますらをぶりの男性的美が、親
鸞時代の中世において、実朝・西行・平家物語に復興してゐること
と同様である。宣長はこの歎異鈔・実朝・西行・平家物語には疎遠
であつた。これらの古典は、莊園経済崩壊の亀裂から噴出した個々
人の悲劇的実存の叫びであつた。この世界觀は、民族宗教や文化仏
教ではなく実存仏教であつた。源語の人々は、国家権力や経済に依
存してゐて、曠野の果てに捨てられた個の不安が少く、その信じた
仏教も文化的なものを含んでゐた。

親鸞は愛欲名利に狂惑する物語的世界からの解脱を願ひとし、飛
花落葉を觀て諦悟する声聞・緣覺をも超えて、無智文盲にして貧乏
な最底辺の極悪人を濟度せんとする。ここになくてなりぬものは、
南無阿弥陀仏の六字名号と、これを説くことばで、文学・文芸・
学問・思想ではなかつた。只称名念仏で濟度されると信じた。南無
阿弥陀仏と唱えて我の無くなるを往生と信じた。愛語よく廻天の力
あることを信じたのである。只今の一念に即得往生できるとも信じ
た。言亡慮絶世界である。この点昌益に似てゐる。本願寺が皇室と
婚姻し、大伽藍と門信徒の多数を誇り、組織力を以て布教し、珍宝
を蔵していることは、唯美主義に墮落してゐるのであつて、親鸞が
公家階級の形式主義に反撥し、又、新興勢力の武家階級の横暴に憤
りを感じ、飽迄も農民・漁民・商人等最底辺の庶民の為に、円頂緇
衣・一簑一笠・白雪の中に行脚布教した人格に恥づべきである。私
は現代の諸々の教団やこれに所屬する僧侶の存在価値を認めず、尊

敬しない。封建的教権に依存して、「個」の尊厳な価値を失っているからである。

宣長の貴族趣味 宣長の非庶民性については、既に詳述したが、彼は町人であるといふことに劣等感を以ていて、これが反応として貴族ぶった男である。「家のむかし物語」というものを書いて、出自を誇って、封建性に執はれている。親鸞は出自を隠し庶民に和光同塵している。かうしたものは宣長には無く、庶民を軽んじこれから離れやうと力めている。「秘本たまくしげ」には、庶民愛もみられるが、紀伊侯の命で奉呈したもので、自発的ではなく、治者は民に慈みを施さねばならぬという風なものであつて、昌益が「慈悲を為す者は善に似たれども、慈悲を受ける者は他の恩を負ふて罪人なり。罪無き者に慈悲を与へて罪に落すときは、慈悲を為る者も又罪人なり。故に慈悲は罪の根なり」。(統道真伝卷五)といったもので依然庶民を見さげている。親鸞においては「弟子一人ももたず」(歎異鈔)人間の平等を自覚させんとして、生涯努力をつづけた。(1)キリスト教的な自己犠牲的愛、上から下に向ふ慈善としてのアガベの愛と異り、昌益の解した如きものでなく、仏教の慈悲は、凡夫同士の下と下との平等愛である。然るに宣長は、

民は天照大御神より、預かり奉れる民ぞといふことを、忘れたまはずして、これ又誠に大切におぼしめして、はぐくみ撫給ふべき事、御大名の肝要なれば、下々の事執行ふ人々にも、此旨をよく示しおき給ひて、心得迷へなきやうに、常々御心を付らるべき御事なり。さて又上に申せるごとく、世の中のありさまは、萬事みな善悪の神の御所為なれば、よくなるもあしくあるも極意のとこ

ろは、人力の及ぶことに非ず、神の御はからひのごとくにならでは、なりゆかぬ物なれば、此根本のところをよく心得居給ひて、たとひ少々国のためにあしきことども、有来りて改めがたからん事をば、俄にこれを除き改めんとはしたまふまじきなり。(玉くしげ)

忽じて国の治まると乱るとは、下の上を敬ひ畏ると、然らざることあることにて、上たる人、其上の厚く敬ひ畏れ給へば、下る者も、又つぎつぎに其上たる人を、厚く敬ひ畏れて、国はおのづからよく治まることなり。(玉くしげ)

といった。これは民を私有、愚民として取扱ひ、固定した上下の階級を認め、文明批判を阻止した封建倫理・封建宗教・神権国家を説くものである。この階級思想は儒教にもあり、この故に幕府は儒教を封建教学として採用し、社会秩序を保守した。かうしたものに抵抗した聖僧は、僅に良寛・仙崖位のものである。

みなかの人々の、文字のころも知らず、あさましき愚癡きわまりなき故に、やすく心得させんとて、同じことをとり返しとり返し書きつけたり。心あらん人はおかしく思ふべし。あざけりをなすべし。然れども、人のそしりをかへりみず、一向におろかなる人々を心得やすからんとしるせるなり。(一念多念証文奥書)

これは親鸞の文である。庶民愛を元にして平易な親鸞の文章様式が生れた。彼は仏典を平易に文芸化した和讃も多く作つていて、ここに文芸復興が認められる。これは近世文芸復興の源泉となつてい

るものである。宣長にはかうした庶民愛が足りない。彼が感情の解放を志したといつても、その影響は学問に志す少数の集團にのみ止

っている。庶民は宣長の論ひに聞せず、記紀萬葉が語り歌ふ原始の世から、感情を解放している健康な人間である。

宣長自身これを学問的に証明している。人間は感情が自由に解放されたら幸福があるが、近世は階級・鎖国・民族の偏見・迷信等の桎があつて、解放感情の獅子王は、雄飛しえなかつた。宣長も亦その一人であつた。感情は主観的・個性的である。それが生物的・家庭的・社会的・国家的・人類的・宇宙的と次第に積極的に無限に拡大され、それが相互に融通無碍自在に結合し、彼が我、我が彼となつた個が、美妙であり、快樂である。これを大乘仏教が説いている。感情には、知性と意志が伴ない行動に実現されて、始めて自由である。

然るに封建の世に妥協した宣長は、個の自由は、家庭的・隠遁的・抒情的な和歌物語の範圍に止り、親鸞の如く、自覚した独立創造を、悲劇的全生命を以て相統せよという論説がない。個（個性・運命・宿命）の自覚とは、人間一般者が個性的であり、自分が独自唯一無二、非代替性の存在であるとの自覚である。この故に個性ある人格は、絶対的尊嚴なる存在である。これを釈尊は、天上天下唯我独尊といひ、親鸞は、「弥陀五劫恩惟の願を、よくよく案ずれば、偏に親鸞一人が為なりけり」（歎異鈔）と自覚している。阿弥陀から信じられて、その広大な大慈大悲の願行を果遂すべき力を廻向されているといふ自信と法悦の自覚である。仏より廻向された大慈大悲（正法）が、絶対善、最高道徳と信じていたから、当時の旧仏教の墮落した教条主義・形式主義・便宜主義を根本から覆し、仏教を少数特権階級の手から、民衆の生活に転化させた。

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、万のこと皆もつて空事た

わごと真実あることなし。ただ念仏のみぞまことにてまします。……本願を信せんには、他の善も要にあらず、念仏にまざる善なき故に。悪をもおそるべからず。弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故にと、云々……信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。（歎異鈔）

親鸞は唯、一者と自尊し、一切の権威に屈服・妥協・依願してないものである。日本に渡つてきた仏教は、釈迦の精神に背いて、常に長い間国家権力に依存していた。法然や親鸞は、仏教を国家権力から切離した。然るに宣長の信仰も学問も、国家権力・封建権力・貴族文学の礼讃である。親鸞の信じた弥陀の浄土とは、万人が主体性を堅持した差別のない理想の自由社会である。封建社会の正反対である。宣長が階級社会を承認している以上、真実の共存的浄土は此土に顕現されず、彼の浄土は唯心の浪漫的浄土に終つた。彼一人の個性や感情は、学問の研究や和歌の創作で満足された。「人生の喜びは、他の人々ができないことをすることにあり。」（バジネット・英・社会学者、一八二六）といふ心は、宣長にもあつたかもしれぬ。然しこれを万人のものにせんとする還相愛の迫力が欠けていた。親鸞においては、念仏することにより、自己の個性の全光力を発揮し、純粹単独に自由自在に生きることが、涅槃であつたら、烏合の集合人力・学問・シヤマニズム的祈祷・既成の倫理・政治権力等は、すべて異端であつた。この異端に対する歎きが、唯円房により歎異鈔に語られてある。

宣長は家の先祖が桓武平氏であるといふ封建的選民意識をもち、（家のむかし物語）その為現在町人であるといふ劣等感を愈々深

め、この反応として、町民の上にあつて町民を蔑視する武士、封建政權に依存して徒食する僧侶を憎み、彼らの思想である儒教仏教に反対し、古事記や源氏物語を研究し、自我を誇示する本能を満足させた。源氏の苗裔である徳川氏に、平氏である宣長が反感をもつたとも考えられるが、由井正雪等々の如く、直接行動を起さず、唯伏して学問と信仰により徐ろに尊皇思想を涵養し、幕府崩壊の原動力となつた一生は、崇高である。

(1) 讚阿弥陀仏偈和讚 解脱の光輪きほもなし、光触かふるものはみな 有無をはなるとのべたもふ、平等覚に帰命せよ。

親鸞の結婚 結婚は有情の聖なる宿業である。これを罪惡とする宗教は、邪教である。但し生物的本能又は社会的慣例をのみ動機として結婚したり、結婚して家庭的本能をのみ満たすことが、最大の価値と考えるならば、罪惡である。家庭的愛欲は、人格の無限なる進化に精進する崇高な願行を障礙するならば、罪惡であり、その罪惡に犯される畏れを感じる者は、釈尊の如く出家せねばならぬ。然し出家は結婚といふ聖業を捨てた怠慢の罪惡を、人情が偏屈しているといふ罪惡がある。その上人格の進化精進に倦怠すれば、罪惡は更に三重になる。かかる出家者が多かつた親鸞もその一人である。それは外に賢善精進の相を保ち乍ら、内に虚仮を抱く偽善者である。これを親鸞は、「悲哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数の入ることを、よろこばず。真証の証に近づくことを樂しまざることを。」(教行証信・信巻)と、嘆いている。人間が宇宙進化の責任者であるとの宗教的理性的の自覚に立つ時、結婚生活に莊嚴な積極的価値が生ずる。それは産靈を神と信じ

た古事記の精神である。出家して仏道に精進する者には、結婚は勿論性交は犯罪であることが、龍樹や無著の著書や、賢愚經・四分講等の仏典に説かれてある。これを宣長は、神の道に背く不自然であると極力攻撃し、惺齋・羅山も、儒教思想によって排斥している。それは不自然な難行道であつたので、多くの破戒者即ち聖道の落伍者を出し、世の嗤笑の種となつたことが、今昔物語・法華驗記下・沙石集・宇治拾遺卷一、古今昔聞集、にみられる。親鸞に結婚の決意を与えたのは、師法然であつた。法然は、

現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくば、なになりともよらずをいとすてて、これをとどむべし。ひじりて申されずは、妻をもうけて申すべし。妻をもうけて申されずば、ひじりにて申すべし。(念仏問答集) といった。念仏とは人格の無限進化を志す崇高なる行願である。人生の一切はこれに統理されている。これが法爾の道理であり、古事記の神の大道である。親鸞の結婚については、次の如き神秘的抒情的伝説がある。

建仁三年癸亥、四月五日の夜、寅の時、上人、夢想の告ましましき。かの記に云く、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して、白衲の袈裟を著眼せしめ、廣大の白蓮華に端坐して、善信に生命してのたまはく、行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂といへり。救世菩薩、善信にのたまはく、これは是わが誓願也。(親鸞伝絵上)

彼は妻を觀音菩薩の権化と敬し、妻も亦彼を觀音の化身と信じた。(惠信尼文書) かうした思考をば、産靈を神と信じ、水分神社の申

し子であると自信した宣長は肯定するであろう。愛執を罪障とする考えが女犯の語にある。その他非僧非俗・愚禿(歎異抄)にもある。かうした否定観を与えたものは、念仏という生命の積極的絶対肯定観である。然るに宣長は

人は教によりてよくなるものにあらず。もとより教をまつものにあらず(玉かつま)

必聖人の道によらざれば、人も皆鳥獸のしわざをのみたまうものと心得たる、愚昧の料簡なり。人は萬物にすぐれたる物と生れつきたれば、もとより鳥獸には遙にまされること、いふもさらにて、聖人の教へなどをからされ共、人たる者のあるべき限は、何事もみづからよく知て行ふことなり。(くつばな下)

といふ。全く否定のない人間の自然肯定である。彼は人間に創造的進化する善性が、先験的に実在している、産靈むすびの神性が生み継がれていると信じていた。だから儒教の教は邪魔だと思った。然し宣長が偉大な著述は、儒仏の教養があつてのことであり、神話を無批判に信仰する態度は、仏教的無の世界に類するものがあり、浄土教の信仰体験によると考えられるから、彼の文化評論は、古事記を信じた為に、偏狭であつたと思はれる。宗教信者は入信の苦惱と同等に、宗我を捨てること努力しなければ、宗教は人類の進化に有害である。

宣長の偏狭 仏教宗派中無教判無宗我の最たるものは、禪である。もし宣長に禪の因縁があつたら、彼の学問も信仰も大飛躍したであろう。禪が無教判であることは、没理性ということではない。極めて理性的であるが故に、教相判釈せずに無宗我である。抑

仏教は世界の宗教中で、最も理性を磨く教である。通仏教で正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定といふ八正道も、法然や親鸞が頻々いった信心の知恵も、人間の達し得る最高の実践理性である。然るに宣長は理性が混濁して、その学説には多くの矛盾がある。それは自然宗教期の神話を語り伝えた古事記を、歴史的事実として盲信したからである。然し宣長にはせれば、儒教は小智、仏教は虚妄であつた。宣長に価値の理性的判断が全然無かつたかというに、さうではない。

抑迦微は如此く種々にて、貴きもあり賤きもあり、強きもあり弱きもあり、善きもあり悪きもありて、心も行もそのさまさまに随ひて、とりどりにしあれば、(古事記伝・増全一ノ一三六)

といふ。ここには禍津日神も、神の個性の自在な活動力も信ぜられている。その善神は、

道は高御産巢日・神産巢日御祖神の産靈によりて、伊邪那岐・伊邪那美の二柱の神のはじめ給ひ、天照大御神の受行はせ給ふ道なれば、必萬の国々。天地の間に普くゆきわたらふべき道なり(玉かつま)

されば世に神はしも多に坐せども、此神(産巢日神)は殊に尊く坐々して、産靈の御徳申すも更なれば、有ルが中にも仰ぎ奉るべき祟き奉るべき神になむ坐ける。(古事記伝・増全、一ノ一四二)まづ第一に此世ノ中の惣體の道理をよく心得おくべし。其ノ道理とは、此天地とも諸神も萬物も皆ことごとく其本は高皇産靈神・神皇靈神と申す二神の産靈のみたまと申す物によりて成出来たる物にして、世々に人類の生れ出、萬物萬事の成出るも、みな此御

靈にあらずといふことなし。(玉くしげ)

とあって、「産靈の御靈」が絶対善神である。「ただ善悪邪正真偽をよくわきまへて、惑はじとするぞ学問にはありける」(呵苺蔑)ともいった。かかる理性判断を以て、悪神である禍津日神については、

悪神と申すは、かの伊邪那岐大御神の御禊の時、予美国の穢より成出たまへる、禍津日神と申す神の御靈によりて、諸の邪なる事、悪しき事を行ふ神たち(玉くしげ)

と説き、生産に反する物事を悪としている。而して「吉善から凶悪が生れ、凶悪から吉善が生れ相代謝することは、善神悪神の行動であること、……悪はつひに善に勝ことあたはざる神代の道理(玉くしげ)が、古事記の事実であることを説いた。次の如くいふ。

黄泉の穢悪に因て、先ず世間の諸の禍害をなしたまふ禍津日神、初に成坐し、其凶悪を滌清むとして、世間の諸の凶悪を吉善に直したまふ直昆神、その次に成坐し、さて滌清め竟て、吉善なれる時に、伊豆能売神成坐るなり。(記伝六)是し凶悪より吉善に移る為にして、世ノ中に凶悪を直して吉善事を行ふべき人の道は此ノ理に固れり(増全一ノ三三二)

大自然界の創造的進化の摂理を、人智人力を超えた妙理として宗教的に信じている。「人身のうへ、くひ物、居どころ、なにくれもろもろの事も、ことごとく神の御めぐみ」(玉かつま)「皆ことごとく神の御靈によりて神の御はからひ(玉くしげ)とふ。故に「人も人の行ふべき限りをば行うが人の道にして」(玉くしげ)「ただ善悪邪正真偽をよくわきまへて、惑はじとするぞ学問にはありける。

「(呵苺蔑)「強ちにもて直きむとしては、中々にしじこらかす事。」(臣道)といふ理性判断も、神を信することによりめぐまれた教智(鈴木大拙師のいふ日本の靈性)である。尋常の理にあらぬ測りがたき妙理に恩頼まれ、妙理に生かされる宣長の信仰(記伝・増全一ノ三一八)は、他力本願・凡夫直入・念仏往生・信心正因、因光成仏、感恩報謝といふ法然や親鸞の浄土教に類似するものがある。宣長によれば、

迎徴とは……人は更にも言はず、鳥獸木草の類ひ、海山など、其余何にまれ、尋常ならず優れたる徳のありて、可畏き物を迎徴とは言なり。「優れたるとは、尊きこと、善きこと、功しきことなどの優れたるのみを云に非ず、悪しきもの奇しきものなども、世に優れて可畏きをば、神と言なり。(記伝卷三)

とする。これは神の本質を大宇宙の生命力と信じ、その具体的歴史的に顕現活動する物事を神と称しているのである。天壤無窮の産靈力、創造進化の実体を神と信じているから、悪神も吉善に移る必然の歴史的存在価値が認められる。但し悪神そのままが価値でなく、これが覆たされる処に、吉善が生産されるのであるから、所謂否定媒介の価値がある。これは一面仏教の煩惱即菩提とか生死即涅槃或は弁証法的発展に類するものがあるけれども、根本的に肯定的世界観に立った事の否定即ち局部的否定で、小乗仏教の如く世間全体を否定していないから、深刻な悲劇的苦悩とか人生批評は現はれていない。神々の生命の神秘的尊厳を礼讃しているけれども、キリスト教の神と異り、ギリシャ神話に似て神は人、人は神であるから、人間性が溢れていて、畏敬しつつも親愛感が保たれる。而も神々は各

々の心のままに、笑ひ、怒り、泣き、強く、弱々しく、優しく、自由に個性を發揮している處は、「臨濟録」や「歎異鈔」によつて生産された大乘菩薩の解脱相であり、天上天下唯我独尊の世界である。宣長曰く、

正しき事善事のみはあらずして、かやうに邪なる事悪き事も必まじるは、これ然るべき根本の道理あり。……悉にすぐれたる善人ばかりになさんとするは、かの唐戎風の強事にしして、これ譬へば、一年の間を、いつも三四月ごろのごとく、和暖にのみあらんとするがごとし。寒暑は人も何もいたむものなれども、冬夏の時候もあるによりてこそ、萬の物は生育することなれ、世中もそのごとくにて、吉事あれば、かならず凶事もあり、また悪事のあるによりて、善事は生ずる物なり、又昼あれば夜もあり、富人あれば、貧しき人もなくてはかなはぬ道理なり。(玉くしげ)

かくの如く、廣大に禍を包撰するのは、直日の絶対勝利を信じるからである。これは親鸞が、

念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたはず。諸善も及ぶことなき故なりと云々(歎異鈔)

と類似する。「末智能比連」の著者が、吉善は必ず凶惡に勝つといふ宣長の思想に疑問を抱いて、

千數百年ノ間ニシモ、此厄シ直シ給イヌ、直毘神コソアヤシケレといふに對していつた。天地の無窮に久しき間にとりては、千數百年などは、只しばしのほどなるものを、難者これを思ひめぐら

さずして、ただ百年にも満ざる人の生涯にのみおもひ比ぶる故に、大きに久して事と思へる、そはいといと小き心なりけり。(くずばな)

冬が必ず春に移る如く、直は必ず禍に勝つて、善神の恩頼合き代が、無窮の未來に顯現するといふ遠大な思想は、文芸の自律性を發覺した「もののあはれ」の説と共に、宣長の価値を重くするものである。而して五十六億七千万歳の後に、此土に出生して衆生を濟度し淨土を造るといふ弥勒を信じた親鸞や日本仏教一般の弥勒信仰に類しているのは、これから暗示されたものと考えられる。これは天壤無窮に國運が進化するといふことを信じた宣長の樂天的歴史觀と一致する。宣長が言うが如く、元來古事記の誌すが如き大乘的樂天的世界觀をもつ日本人が、仏教の悪影響で、悲觀的消極的厭世觀になつたことは、史論である慈鎮の愚管抄が明かな証文である。これは仏教に欠陥があるのではなく、小乘仏教をのみ信じえて、大乘仏教を信行し得なかつた。「人の心至愚にして、昔より未だ聖人生れず、生知うまれず、いはんや學道の実士稀なる」(正法眼藏鈴音山色の卷)日本の責任である。親鸞の功績は、古事記の大乘仏教的民族精神の萌芽を啓発し、旧仏教の小乘的迷信仏教を真大乘に正直した処にある。即ち旧仏教を誤信した人生の無責任な隱遁性・呪術性・利己を斥け、無常觀・末法觀・罪惡觀を超越した。彼の思想は近代的なものも多く含み、信長や惺齋・羅山・仁齋・素行にも類似思想が見られる。これら儒者の現実主義・國體尊重は、論理こそ異なれ宣長と一致する。又、古事記の禍惡・醜惡が必ず善美に直るといふ包撰の信仰は、原始的詩情・日本の美的母胎であつて、ヴァリー

は、「最良にして善と美が最も豊富に完備した世界、即ち醜悪も尚善と美に転ぜらるる如き世界を選ぶことが、神の完全性に自ら所属する。これをライプニッツ（一六四六一—一七一六）は、現実の現実に対する充足理由の原理」といつている(1)ニーチエの運命愛も亦同じ論理である。古事記も亦これと同じ原理を内容としていつている。これを親鸞教により歌論に活用した天才的思想家が富士谷御杖である。

古事記の人間像は、各時代の日本文芸が理想として親愛したものであり、未来も亦理想とすべきものである。聖徳太子・人麿・業平・道長・光源氏・親鸞・義経・秀吉・良寛・隆盛・大拙等がそれである。これらの人々は、生の根源に触れた実存的人間である。現代の文芸には理想像が無い。吾々は古事記・萬葉・源氏物語・歎異抄・華厳経・法華経・維摩経・涅槃経・浄土三部経・易経・詩経・老子・莊子を誦し、日本の靈性・大地性・東洋的叡智に覚醒しなければならぬ秋に立たされている。

(1) 田辺元著ヴァリーの芸術哲学三〇頁

跋 宣長は近世封建の階級制度を黙認し、封建社会に妥協している。吾々はこの点では、彼の学問人格を尊敬することができにくい。仏教の平等思想は、釈尊の在世時代既にインドの階級社会と斗った体験をもっているから、近世日本の階級制を打倒する任務を果さねばならぬのであるが、近世僧侶寺院も亦、封建制度の番犬となり、鎖国とキリスト教禁制に協力し、その報酬として、庶民を感化する必要なくして、門徒を与えられ、一物をも生産せずして、庶民の供養する衣食住によって生活できた。所謂飲食服衣の徒食者であった。野に餓孚・困乏・轆軻・不遇があつたが、これを濟度した僧

侶の名が、文芸等に遺る者極めて少く、これに反し墮落僧を書いた文芸は、極めて多い。私はこれを詳らかにせねば、近世文芸の本質に達せられないと考えて、只今調査中であるから、機会をえて発表せうと思つていつている。さて右の様に僧侶自体が、遊墮であつたから、宣長が大乗仏教の神髓に疎遠であつたことを責めることはできないとも考えられるが、彼は学者であるから、やはり責任が無いとはいへない。富永仲基のように、仏教を研究して画期的な業績を遺している町人学者もいたのである。

かうした仏教学者や高僧については、「梅光大学国文学研究第一号」に、概説したが、その詳細については、別に論究する計画である。

昭和四十一年十一月二十一日稿了